

次の英文を読んで、あとの問いに答えよ。

There is an old, famous joke about a drunk man searching for his lost keys under a streetlight late at night. A police officer approaches the man and, joining the search, asks if he is absolutely certain that this is where he dropped them. "(A)," the man replies simply, pointing into the complete darkness halfway down the street, "I actually dropped them over there, but the light is much better here." This simple story, known to social scientists as the "Streetlight Effect," serves as a perfect illustration of a mental trap that has caught the modern world: (B)our overwhelming obsession with numbers and measurements.

We live in an era that worships data. We are told, directly and indirectly, that numbers do not (①). From the steps we walk and the calories we eat to the economic growth of nations and the "likes" on social media posts, we operate under the attractive assumption that if something exists, it can be measured, and if it can be measured, it must be improved. This data-driven approach has, without a doubt, improved global systems, advanced medical treatments, and made many industrial processes more efficient. However, when (C)this same logic is applied to the messy, subjective, and deeply complex reality of human experience, this focus on *metrics often leads us in the wrong direction. Like the man in the story, we find ourselves searching for answers where the data is easiest to collect—under the bright light of the spreadsheet—rather than where the truth actually lies, in the shadows of uncertainty.

Consider the current state of our education system. Standardized test scores are incredibly easy to track, collect, and compare across schools and countries. They (②) policymakers and parents alike with a comforting illusion of objectivity and control. Yet, anyone who has ever stepped into a classroom knows that these scores (③) to capture critical human qualities such as curiosity, resilience, empathy, and creativity. Because these traits are inherently difficult to measure—how does one assign a number to a student's kindness?—they are frequently ignored in school programs designed to maximize test performance. (D)In this situation, the metric ceases to be a measure of education and becomes the target itself, distorting the very process of learning it was meant to evaluate.

This tendency creates a dangerous blind spot in our collective understanding of the world. We prioritize "hard" data over "soft" intuition, dismissing personal stories or observation as unscientific or irrelevant. In the business world, companies may relentlessly try to improve short-term efficiency—a metric that is easily tracked on a quarterly report—while slowly destroying the long-term trust of their employees or

customers, a value that remains invisible until the moment it is completely broken. We confuse the map for the land itself, believing that the spreadsheet represents the world, when in fact it represents only a thin slice of reality that happens to be countable.

The problem, it must be stated, is not the data itself; data is a tool, and a powerful one at that. The problem is the arrogance with which we interpret it, and the dismissal of anything that cannot be reduced to a number. We must recognize that the most (④) aspects of life often cannot be calculated. You cannot calculate the precise value of a walk in the woods, the comfort of a friendship, or the cultural importance of a tradition. These things (E-1), in the most significant sense of the word, even if they cannot be (E-2).

To truly navigate the complexities of the twenty-first century, we need to venture (⑤) the safety of the streetlight. We must develop the intellectual courage to look into the darkness where the data does not reach. It is there, in the unmeasured and the unknown, that the keys to our well-being are most likely to be found. Only by acknowledging the limits of [F].

*metrics 測定基準

問 1

空所①～⑤に入れるのに最も適当な語（句）を、それぞれの選択肢から1つずつ選び、記号で答えよ。

①の選択肢

ア help イ matter ウ lie エ pay off

②の選択肢

ア give イ lead ウ provide エ show

③の選択肢

ア fail イ miss ウ try エ stop

④の選択肢

ア meaningful イ objective ウ personal エ sophisticated

⑤の選択肢

ア beyond イ within ウ on account of エ regardless of

問 2

空所(A)に入れるのに、最も適当なものを以下のうちから選び、記号で答えよ。

ア Yes イ Maybe yes ウ Perhaps no エ No

問 3

下線部(B)の根底には、筆者のどのような考えがあるか。次のうちから筆者の考えに最も合致したものを1つ選び、記号で答えよ。

- ア 我々は世界を理解する際、数値やその測定という無益なものに執着しすぎている
- イ 数値やその測定は手段であるはずが、その収集が目的となってしまうている
- ウ 世界を理解する際の数値やその測定の意義を、現代人は見いだせるようになった
- エ 数値やその測定という、現代ではまだ完成していない手段に依存しすぎている

問 4

下線部(C)はどのような考え方を指すか、句読点を含めて 40～50 字の日本語で説明せよ。

問 5

下線部(D)を和訳せよ。その際、it が指す内容がわかるように訳すこと。

問 6

空所(E-1)および(E-2)には、同じ動詞が、必要に応じて活用された形で入る（必ずしも同じ形とは限らない）。その動詞の原形を答えよ。

問 7

以下の与えられた語を適切に並べ替え、空所[F]に入れるのに、最も適当な表現を完成させよ。

be, calculated, can, can, hope, matters, to, understand, we, what, what

解答例

- 問1 ① ウ ② ウ ③ ア ④ ア ⑤ ア
- 問2 エ
- 問3 イ
- 問4 何かが存在すればそれは測定可能であり，測定できるものは改善されなければならないという考え方。(46字)
- 問5 このような状況では，その測定基準は教育を測る尺度ではなくなって，それ自体が目標と化し，その測定基準が本来評価するはずだったまさにその学習の過程そのものを歪めてしまうのである。
- 問6 **count**
- 問7 **what can be calculated can we hope to understand what matters**

解説

問1 空所補充問題には、空所の前後の形（語法）から選択肢を絞れるものと、文脈（意味）から絞れるものがある。本問でもその両方を意識しながら、1つずつ検討していこう。

① We are told, directly and indirectly, that numbers do not (①).

正解はウ。Numbers don't lie.「数字は嘘をつかない」は慣用的な言い回しである。直前の文"We live in an era that worships data."で、現代はデータを「崇拝する」時代だと述べられているから、その時代に言い聞かされる内容は、数字を信頼し、ありがたがるものでなければならない。ア「数字は役に立たない」、イ「数字は重要ではない」はデータ崇拝とは正反対の内容であり、エ pay off「(努力などが) 報われる、成果を生む」を入れても「数字は成果を生まない」となって、やはり文脈に合わない。

② They (②) policymakers and parents alike with a comforting illusion of objectivity and control.

正解はウ。空所の後ろが<名詞+with 名詞>の形になっていることに注目しよう。この語法を取るのは、選択肢の中では provide だけである。<provide A with B>「A に B を与える」は読解だけでなく、英作文をするうえでも必須の重要語法であるので、確実に覚えておこう。「人にものを～する」の意味の場合、give や show は<give O₁O₂> <show O₁O₂>のように第4文型で用い、with は用いない。lead は<lead A to B>「A を B に導く」の形が基本であり、やはり with とは結びつかない。意味の上ではどれも入りそうに見えるが、語法から1つに絞れる問題である。なお、<A and B alike>は「A も B も同様に」の意味。

③ Yet, anyone who has ever stepped into a classroom knows that these scores (③) to capture critical human qualities such as curiosity, resilience, empathy, and creativity.

正解はア。<fail to do>は「～しない、～できない」の意味である。文頭の Yet によって、直前の「標準テストの点数は、客観性が保たれ、物事を統制できているという心地よい錯覚を与えてくれる」という内容と逆接でつながっているから、ここには点数が大切な資質を「とらえられない」という否定的な内容が入るはずである。実際、次の文でも、そうした資質は測定が難しいため無視されている、

と述べられている。ウ **try** を入れて **try to capture** とすると「とらえようとする」という意味となり、逆接の意味が出ない。イ **miss** は後ろに動名詞をとる動詞であり、**to** 不定詞は続かない。エ **stop** の後ろに **to** 不定詞を置いた場合は、「～するのをやめる」でなく「～するために」という目的を表す副詞用法となり、結局「とらえるために立ち止まる」という意味になるが、これでは文意が通らない。

- ④ We must recognize that the most (④) aspects of life often cannot be calculated.

正解はア。直後の文で、計算できないものの例として、森を散歩することの正確な価値、友情がもたらす安らぎ、ある伝統が文化的にいかに重要であるか、が挙げられている。これらに共通するのは、数値化はできないが、人生にとってかけがえのない「意味のあるもの」だということである。イ **objective** 「客観的な」は、筆者がむしろ数値の側に結びつけている性質であり（第3段落の"**a comforting illusion of objectivity**"), 正反対の意味になってしまう。ウ **personal** 「個人的な」は、友情などは個人的なものと言えなくもないため、最も紛らわしい選択肢であったかもしれない。しかし、ある伝統が「文化的に」いかに重要であるかは個人的なものとは言えず、挙げられた例全体をまとめる語としては不十分である。エ **sophisticated** 「洗練された、高度な」は、挙げられた例とは結びつかない。

- ⑤ To truly navigate the complexities of the twenty-first century, we need to venture (⑤) the safety of the streetlight.

正解はア。**venture** は自動詞で「危険を冒して（思い切って）進む」という意味であり、後ろには方向を表す語句が続く。この単語を知らなくても、**adventure** 「冒険」から意味の見当はつけられたはずだ。**beyond** 「～を越えて、～の向こうへ」を入れれば、「街灯という安全地帯の外へと思い切って踏み出す」となり、次の文の"**look into the darkness where the data does not reach**" 「データの届かない暗闇をのぞき込む」と合致する。イ **within** 「～の内側で」は正反対の意味である。ウ **on account of** 「～という理由で」、エ **regardless of** 「～にかかわらず」はいずれも **venture** の方向を示すことができず、文意も通らない。

問2 正解はエ。

A police officer approaches the man and, joining the search, asks if he is absolutely certain that this is where he dropped them.

ここでの if は「～かどうか」という意味である。なぜなら、ask は他動詞であって後ろには目的語が必要であり、if の節は ask の目的語でなければならない。その結果、if の節は名詞節であることがわかる。そして、if が名詞節を導くとき、その意味は「～かどうか」であり、決して「もし～ならば」とはならないからである。このように、節の意味は、その節がどのような品詞の節となっているかが決まって、“初めて”意味を決めることができる。決して、いきなり意味を決めつけなようにしよう。もし、このような、意味をいきなり決定するという訳の決め方をあなたがしていた場合、それは英語を解釈しているのではなく、「勘で意味を当てにしている」ということである。そんなギャンブルみたいな方法で、英語を読んでいては、今回みたいな易しめの勘が当たりやすい英文ならともかく、難関大学の英語で差が付くような複雑な文での正確な解釈はおぼつかない。

さて、本文に戻り、警官の質問は間接話法で書かれていることに注意すると、警官は"**Are you absolutely certain that this is where you dropped them?**"「ここで落としたのは間違いないのか」と尋ねたことになる。これに対して男は、空所の直後で"**I actually dropped them over there**"「実はあっちで落としたんだ」と答えている。ここで落としたわけではないのだから、答えは **No** である。

イ **Maybe yes**, ウ **Perhaps no** はいずれも曖昧な答え方である。しかし、男は鍵を落とした場所をはっきりと知っており、また、**the man replies simply**「男はあっさりと答える」とあることから、曖昧に答えたとは考えられない。

なお、この逸話が滑稽なのは、男が鍵のある場所を知っているが、「こちらのほうが明るいか」という理由で見当違いの場所を探している点にある。探すべき場所ではなく、探しやすい場所を探してしまうというこの構図が、本文全体を通じて筆者が批判する「数値や測定への執着」の比喻となっているのである。

問3 正解はイ。下線部(B)は、コロンの後ろに置かれ、その前の **a mental trap that has caught the modern world**「現代社会を陥れてしまっている心理的な罠」が具体的に何であることを説明している。**obsession** は「(何かに) 憑りつかれていること、執着」という否定的な意味合いの強い語であり、これに **overwhelming**「圧倒的な」が付いていることから、筆者が数値や測定への過度なこだわりを問題視していることがわかる。

では、筆者は数値や測定そのものを否定しているのだろうか。第5段落の冒頭を見よう。

The problem, it must be stated, is not the data itself; data is a tool, and a powerful one at that. The problem is the arrogance with which we interpret it, and the dismissal of anything that cannot be reduced to a number.

筆者はデータを「道具 (tool)」, それも「強力な道具」だと明言しており, 問題はデータそのものではなく, その扱い方にあるとしている (a powerful one at that の one は a tool を受けており, at that は「しかも, そのうえ」の意味)。そして, 道具であるはずの数値が目的そのものになってしまうという事態は, 下線部(D)の "the metric ... becomes the target itself" に端的に示されている。また, 冒頭の逸話も, 鍵を見つけるという本来の目的を忘れ, 明るくて探しやすい場所を探すこと自体が目的となってしまった姿として読むことができる。以上より, イが筆者の考えに最も合致する。

アは数値や測定を「無益なもの」とするが, 第2段落で筆者は, データ主導のやり方が世界の仕組みを改善し, 医療を進歩させ, 工業工程を効率化してきたことを without a doubt 「疑いなく」と認めており, 本文と矛盾する。

ウは, 現代人が数値の意義を見いだせるようになったと肯定的に述べているが, 下線部は現代人の「執着」を「罣」として批判する文脈にあり, 筆者の考えとは方向が逆である。

エは「まだ完成していない手段」とするが, 筆者はデータの精度や完成度を問題にしているわけではない。問題とされているのは, 上で見たように, データを解釈する際の傲慢さと, 数値に還元できないものを切り捨てる姿勢である。本文に根拠のない内容を含んでおり, 不適である。

問4 下線部(C)の this same logic は, 指示語 this と same を含んでいることから, 直前ですでに述べられた「論理」を指していると考えられる。では, 直前で「論理」と呼べるものは何か。第2段落第3文を見よう。

From the steps we walk and the calories we eat to the economic growth of nations and the "likes" on social media posts, we operate under the attractive assumption that if something exists, it can be measured, and if it can be measured, it must be improved.

the attractive assumption の直後の that は同格の that であり, assumption 「前提, 想定」の中身が that 以下で示されている。その中身は「何かが存在するなら, それは測定できる」「測定できるなら, それは改善されなければならない」という, if を2度重ねた「A ならば B, B ならば C」という推論の連鎖になっている。これこそ logic と呼ぶにふさわしい内容であり, 下線部はこれを指している。なお, From A and B to C and D の部分は <from A to B> 「A から B に至るまで」の形であり, 歩数やカロリーといった個人の身近な数値から, 国家の経済成長や SNS の反応に至るまで, あらゆるものが数値化の対象となっていることを示している。

次に、下線部を含む文が **However** で始まっていることに注目しよう。直前の文では、データ主導のやり方が世界の仕組みを改善し、医療を進歩させ、工業工程を効率化してきたことが述べられている。つまり、同じ論理が、そうした分野では成功を収めた一方で、人間の経験という雑然として主観的な領域に当てはめられると (**is applied to ...**)、我々を誤った方向へと進ませてしまう、というのである。**same** が用いられているのは、この対比を明確にするためである。

解答の作成にあたっては、**must be improved** の **must** を「～に違いない」という推量ではなく、「～されなければならない」という義務の意味で訳すこと。歩数、カロリー、経済成長、「いいね」の数と、例に挙げられたものがいずれも「増やすべきもの、改善すべきもの」として扱われていることから、ここでの **must** が義務の意味であることがわかる。

問 5 **In this situation, the metric ceases to be a measure of education and becomes the target itself, distorting the very process of learning it was meant to evaluate.**

まず、文頭の **In this situation** の **this situation** は、直前の文の内容、すなわち「好奇心や共感力などの資質は測定が難しいため、テストの成績を最大化するように作られた学校のプログラムでは無視されてしまう」という状況を指す。そして、**the metric** 「その測定基準」とは、第3段落で話題となっている標準テストの点数 (**standardized test scores**) のことである。

文の骨格は **the metric ceases to be ~ and becomes ...** 「その測定基準は～でなくなり、～になる」である。<**cease to do**> は「～しなくなる」の意味。**measure** はここでは名詞で「尺度、物差し」の意味である。

the target itself の **itself** は **target** を強調しており、「目標そのもの」ということである。つまり、本来は教育の成果を測るための「物差し」にすぎなかったテストの点数が、それを上げることで自体が目的となってしまう、ということだ。これはまさに、問3で見た「手段の目的化」にほかならない。

カンマの後ろの **distorting ...** は、文末に置かれた分詞構文である。このように主節の後ろに置かれた分詞構文は、主節の出来事の結果として生じることを表すことが多く、「そして～を歪めてしまう」と訳し下すとよい。

本問の最大のポイントは、**the very process of learning it was meant to evaluate** の部分である。**learning** の直後に **it was meant ...** と <**S+V**> が続いている（つまり、名詞 **SV** という構造となっている）ことから、ここには目的格の関係代名詞 (**which / that**) が省略されていることを見抜かなければならない。関係詞節中の **evaluate** の目的語が欠けており、それに当たるのが先行詞の **the very process of learning** である。

さて、it が指す内容を考えてみよう。it は中学1年で学習するように、すでに出てきた“単数名詞”を指す。今回の場合、単数名詞が直前にいくつか出てくるが、<be meant to do>は「～することになっている、～するためのものである」の意味であり、この内容から、it は評価をするためのもの、もっと言えば、(evaluateの目的語である) 評価対象が先行詞の「学習の過程」であることから、主語の it が指しているのは the metric (その測定基準) であると断定できる。was meant to evaluate は、ここでは本来の測定基準の役割を表しているので、「本来評価するはずだった」と訳すとよいだろう。なお、the very は「まさにその」と名詞を強調する。

以上をまとめると、「その測定基準が本来評価するはずだった、まさにその学習の過程そのものを歪めてしまう」となる。

問6 正解は count。

These things (E-1), in the most significant sense of the word, even if they cannot be (E-2).

まず、(E-2)から考えよう。cannot be の後ろであるから、ここには過去分詞が入り、受動態を作ると考えるのが自然である。したがって、ここに入るのは他動詞である。また、These things は直前の文の「森を散歩することの価値」「友情がもたらす安らぎ」「ある伝統が文化的にいかに重要であるか」を指しており、これらは筆者が「計算できない (cannot be calculated)」と述べてきたものである。そこで、(E-2)には calculated に近い意味の他動詞が入ると見当をつけることができる。

次に(E-1)である。こちらは These things を主語とし、目的語をとっていないので、自動詞として用いられている。even if「たとえ～でも」によって(E-2)と対比されていることから、「たとえ○○されなくても、それらは△△だ」という内容になるはずである。筆者の主張は、計算できないものにこそ最も意味がある (空所④) ということであったから、(E-1)には「重要である」という意味の語が入ると考えられる。

他動詞としては「～を数える」、自動詞としては「重要である、価値がある」という意味をもつ動詞、それは count である。count は自動詞で「数に入る」、そこから「重要である、ものを言う」という意味で用いられる (例: Every vote counts. 「一票一票が大切だ」)。

ここで、in the most significant sense of the word「その語の最も重要な意味において」という挿入句に注目したい。the word とは(E-1)に入る語、すなわち count そのものを指している。つまり筆者は、「数える」と「重要である」という count

の2つの意味を掛けた言葉遊びをしており、「数えることはできなくとも、**count** という語の最も重要な意味においては、**count** する (=重要である)」と述べているのである。この挿入句自体が、同じ語が複数の意味で使われていることを示すヒントになっていた。また、第4段落の"**a thin slice of reality that happens to be countable**"に、すでに **count** の派生語が登場していたことにも気がついただろうか。

問7 空所を正しく並べ替えて完成した文は以下のようになる。

Only by acknowledging the limits of [what can be calculated can we hope to understand what matters].

並べ替えのポイントは、文頭の **Only by ...** である。**only** は今回のように一種の否定語として使われることがあるが、否定の意味をもつ副詞(句)が文頭に置かれると、その後ろは強制的に倒置を起し、疑問文と同じ語順の倒置になるというルールがある。したがって、主節は **we can hope** ではなく **can we hope** となる。

与えられた語に **can** が2つ含まれていることに注意しよう。1つは倒置された主節の **can**、もう1つは名詞節の中の **can** である。**calculated** は過去分詞であるから、**be** とともに受動態を作り、**what can be calculated** 「計算できるもの」というまとまりになる。一方、**matters** は3人称単数現在の-s が付いた動詞であるから主語が必要であり、**what matters** 「大切なもの、重要なもの」というまとまりになる(**matter** は自動詞で「重要である」の意味。問6の **count** とほぼ同じ意味であることにも注意しよう)。また、**hope** は <**hope to do**> の形をとるから、**hope to understand** となる。

ここまで来ると、**the limits of** の後ろと **understand** の後ろに、**what can be calculated** と **what matters** のどちらを置くかで、文法的には2通りの組み合わせが考えられる。どちらが正しいかは、文法ではなく意味で決まる。仮に

Only by acknowledging the limits of what matters can we hope to understand what can be calculated.

としてしまうと、「大切なものの限界を認めることによって初めて、計算できるものを理解することが望める」となり、本文の主張とはかけ離れたものになってしまう。筆者はこの文章を通じて、計算できるもの(数値)には限界があり、計算できないものにこそ大切なものがあると一貫して述べてきた。したがって、「計算できるものの限界を認めることによって初めて、大切なものを理解することが

望める」となる語順が正解となる。並べ替え問題でも、最後は本文の論旨との整合性を確認することが大切である。

ところで、この最終段落が冒頭の酔っ払いの逸話と呼応していることに気が付いたでしょうか。直前の文"**It is there, in the unmeasured and the unknown, that the keys to our well-being are most likely to be found.**"は **It is ... that** ～の強調構文であり、**the unmeasured and the unknown** は＜the＋形容詞＞で「測定されていないもの、未知のもの」を表す。したがって、ここの意味は、「我々の幸福への鍵が最も見つかりやすいのは、まさにそこ、すなわち、測定されていないもの、未知のものの中なのである」ということになる。ここに出てきた「鍵」は、冒頭で酔っ払いが探していた「鍵」に掛けられていたというわけだ。

全文

There is an old, famous joke about a drunk man searching for his lost keys under a streetlight late at night. A police officer approaches the man and, joining the search, asks if he is absolutely certain that this is where he dropped them. "No," the man replies simply, pointing into the complete darkness halfway down the street, "I actually dropped them over there, but the light is much better here." This simple story, known to social scientists as the "Streetlight Effect," serves as a perfect illustration of a mental trap that has caught the modern world: our overwhelming obsession with numbers and measurements.

We live in an era that worships data. We are told, directly and indirectly, that numbers do not lie. From the steps we walk and the calories we eat to the economic growth of nations and the "likes" on social media posts, we operate under the attractive assumption that if something exists, it can be measured, and if it can be measured, it must be improved. This data-driven approach has, without a doubt, improved global systems, advanced medical treatments, and made many industrial processes more efficient. However, when this same logic is applied to the messy, subjective, and deeply complex reality of human experience, this focus on metrics often leads us in the wrong direction. Like the man in the story, we find ourselves searching for answers where the data is easiest to collect—under the bright light of the spreadsheet—rather than where the truth actually lies, in the shadows of uncertainty.

Consider the current state of our education system. Standardized test scores are incredibly easy to track, collect, and compare across schools and countries. They provide policymakers and parents alike with a comforting illusion of objectivity and control. Yet, anyone who has ever stepped into a classroom knows that these scores fail to capture critical human qualities such as curiosity, resilience, empathy, and creativity. Because these traits are inherently difficult to measure—how does one assign a number to a student's kindness?—they are frequently ignored in school programs designed to maximize test performance. In this situation, the metric ceases to be a measure of education and becomes the target itself, distorting the very process of learning it was meant to evaluate.

This tendency creates a dangerous blind spot in our collective understanding of the world. We prioritize "hard" data over "soft" intuition, dismissing personal stories or observation as unscientific or irrelevant. In the business world, companies may relentlessly try to improve short-term efficiency—a metric that is easily tracked on a quarterly report—while slowly destroying the long-term trust of their employees or customers, a value that remains invisible until the moment it is completely broken. We

confuse the map for the land itself, believing that the spreadsheet represents the world, when in fact it represents only a thin slice of reality that happens to be countable.

The problem, it must be stated, is not the data itself; data is a tool, and a powerful one at that. The problem is the arrogance with which we interpret it, and the dismissal of anything that cannot be reduced to a number. We must recognize that the most meaningful aspects of life often cannot be calculated. You cannot calculate the precise value of a walk in the woods, the comfort of a friendship, or the cultural importance of a tradition. These things count, in the most significant sense of the word, even if they cannot be counted.

To truly navigate the complexities of the twenty-first century, we need to venture beyond the safety of the streetlight. We must develop the intellectual courage to look into the darkness where the data does not reach. It is there, in the unmeasured and the unknown, that the keys to our well-being are most likely to be found. Only by acknowledging the limits of what can be calculated can we hope to understand what matters.

全訳

夜遅く、酔っ払った男が街灯の下でなくした鍵を探している、という昔からある有名な笑話がある。警官がその男に近づき、一緒に探しながら、ここで落としたのは間違いのないかと尋ねる。「違うよ」と男はあっさり答え、通りを半分ほど行った先の真っ暗闇を指さす。「実はあっちで落としたんだ。でも、こっちのほうがずっと明るいでね」。このシンプルな話は、社会学者の間では「街灯効果」として知られており、現代社会を陥れてしまっている心理的な罠を見事に例示するものとなっている。すなわち、数値や測定に対して我々が恐ろしいほど憑りつかれている、ということ。

我々はデータを崇拜する時代に生きている。数字は嘘をつかないと、直接的にも間接的にも言い聞かされている。歩いた歩数や摂取したカロリーから、国家の経済成長やソーシャルメディアの投稿につく「いいね」に至るまで、我々は、何かが存在するならそれは測定でき、測定できるならそれは改善されなければならない、という魅力的な前提のもとで行動している。このデータ主導のやり方が、世界のさまざまな仕組みを改善し、医療を進歩させ、多くの工業工程をより効率的にしてきたことは疑いようがない。しかし、この同じ論理が、人間の経験という雑然として、主観的で、きわめて複雑な現実に対当てはめられると、このように測定基準を重視することは、しばしば我々を誤った方向へと進ませてしまう。冒頭の話の男のように、我々は気がつけば、不確かさの暗がりの中という、真実が実際にある場所ではなく、スプレッドシートの明るい光の下という、データが最も集めやすい場所で答えを探しているのである。

現在の教育制度の状況を考えてみよう。標準テストの点数は、記録し、収集し、学校間や国家間で比較するのがきわめて容易である。それは政策立案者にも保護者にも同様に、客観性が保たれ、物事を統制できているという心地よい錯覚を与えてくれる。しかし、教室に一步でも足を踏み入れたことのある人なら誰でも、こうした点数が、好奇心、粘り強さ、共感力、創造性といった、人間の決定的に重要な資質をとらえられないことを知っている。こうした特性は本質的に測定が難しいため（生徒の優しさにどうやって数値をつけるというのか）テストの成績を最大化するように作られた学校のプログラムでは、無視されてしまうことが多い。このような状況では、その測定基準は教育を測る尺度ではなくなって、それ自体が目標と化し、その測定基準が本来評価するはずだったまさにその学習の過程そのものを歪めてしまうのである。

こうした傾向は、世界に対する我々の共通理解に、危険な死角を生み出す。我々は「ソフトな」直観よりも「ハードな」データを優先し、個人の体験談や観察を、非科学的だとか的外れなものだとか言って退けてしまう。ビジネスの世界では、企業は四半期報告書で容易に追跡できる測定基準である短期的な効率をひたすら向上させようとする一方で、従業員や顧客からの長期的な信頼を少しずつ壊していくことがある。信頼とは、完全に壊れるその瞬間まで目に見えないままの価値なのだ。我々は地図を土地そのものと取り違え、スプレッドシ

ートが世界を表していると信じているが、実際にはそれが表しているのは、たまたま数えることのできる、現実のほんの薄い一片にすぎないのである。

断っておかなければならないが、問題はデータそのものではない。データは道具であり、しかも強力な道具である。問題は、我々がデータを解釈する際の傲慢さであり、数値に還元できないものを何であれ切り捨ててしまうことである。人生の最も意味のある側面は、計算できないものであることが多いということを認識しなければならない。森を散歩することの正確な価値も、友情がもたらす安らぎも、ある伝統が文化的にいかに重要であるかも、計算することはできない。こうしたものは、たとえ **count** する（数える）ことはできなくとも、この語の最も重い意味において、**count**（重要である）もののなのである。

21 世紀の複雑な状況を本当にうまく切り抜けていくためには、我々は街灯という安全地帯の外へと思い切って踏み出す必要がある。データの届かない暗闇をのぞき込む知的な勇気を身につけなければならない。我々の幸福への鍵が最も見つかりやすいのは、まさにそこ、すなわち、測定されていないもの、未知のものの中なのである。計算できるものの限界を認めることによって初めて、我々は大切なものを理解することが望めるのだ。